

# 教育臨床心理学 練習問題追加 by s.w.r.

## 練習問題9

挫折愛タイプのストーカーの心理について述べよ。

## 練習問題10

対人恐怖はなぜ青年期に起こりやすいのか説明せよ。

## 練習問題11

幼児は男らしさ、女らしさをどのようにして身につけるか、精神分析理論の立場から説明せよ。

## 練習問題12

自己愛傾向と攻撃性について説明せよ。

## 練習問題13

次の語句を具体的な例をあげて説明せよ。

- ① 利己的な帰属のバイアス
- ② 栄光浴
- ③ 内集团的態度
- ④ 自己評価維持理論
- ⑤ セルフ・ハンディキャップ方略

## 解答9

ストーカーのうち、挫折愛タイプと呼ばれるストーカーは、一時期、被害者との何らかの交流、交際があったが、被害者からの一方的な交流、交際の打ち切りの申し出が発端となるタイプのストーカーである。

このタイプのストーカーは相手の意思にかかわらずに、これまでどうい関係が続け

ていくことを強く求め、また、そのことに拘る性質がある。

求愛のみならず、攻撃が加わることもあり、嫌がらせ、つきまとい等を行い、それが傷害に発展することもある。

## 解答10

対人恐怖には、対人場面で顔が紅潮する赤面恐怖、自分の体を臭いと思う自己臭恐怖、自らの容姿が異様だと感じる醜貌恐怖などの種類が存在する。

青年期の第二性徴においては、急激な身体の変化が生じ、自分に対して注意が向きやすいために、自己意識が高くなる傾向がある。

その自意識が過剰になった時、「見られているのでは」「顔が赤くなったと思っているのでは」「変なおいをだしていると思われているのでは」などという他者の目を気にする心理となるため、対人恐怖は青年期で起こりやすくなるのである。

## 解答11

まず、局所論の観点からみても。

幼児が主に影響を受けるのは、親や家族といった周囲の人々が「女の子として」「男の子として」育てることに大きな要因がある。

すなわち、女(男)の子っぽいとされる服を着せられるといった環境のなかで育てられることで、無意識のうちに「自分はこのように女(男)の子らしくあるべき」という自己イメージが形成され、それによって行動が決定され、「男らしさ、女らしさ」を身につけると考えられる。

次に、発達論の観点から見れば、エディプス期での異性への興味によって男女の違いというものを意識し、また、同性の親への同一視の過程で「男らしさ、女らしさ」を身につけていくと考えられる。

## 解答12

自己愛傾向を持つ人は、裏付けとなる確固としたものがないにもかかわらず、自分の容姿は美しいと思っていたり、自分が人とは違い高い能力を持っていると思っている。

また、その考えを維持するために自尊心方略を使う。

自尊心方略とは、他人からの情報、他人の言動を自分に都合よく解釈し、自尊感情

の高揚、維持に使うというものである。

しかし、自分に自信を持つ一方で、その自信の裏付けとなるものに乏しく、自らもそれを意識しているため、他人の批判に敏感である。自己イメージを脅かす他者に対しては感情的になったり、攻撃性を持ったりする。

それは、非現実的に高い自尊心、自己イメージへの不安の表れでもある。

## 解答13

- ① 成功場面では内的、安定した原因に帰属し、失敗場面では外的、不安定な原因に帰属することで、成功場面では自尊感情を高め、失敗場面では自尊感情を下げないようにするもの。

例えば、テストでよい成績をとった場合に、能力があったから、努力をしたから、と考え、逆に成績が悪かった時は、今回は日程が悪かった、先生が悪問を出した、などと考えるものである。

- ② 高い能力を持っていたり、世間から高い評価を受けていたりする人と自分との結びつきを主張することで、自尊感情を高めようとするもの。

例えば「自分の大学は野口さんの出身校だ」などがある。

- ③ 自分が所属する集団(内集団)を高く評価することで、自分がその集団に所属することに肯定的な意味をもたせ、自尊感情を高揚させること。また、他集団の評価を下げることによって相対的に内集団の評価を上げ、自尊感情を高めること。

例えば「私の予備校は東大に722人合格した」「東大生は性格が悪い(明大生は東大生と比べたら性格が良い)」ということなどである。

- ④ 心理的距離の近い他者との関係において、「反映」と「比較」を使い分けることにより、自己評価を高く維持しようとするものである。

反映とは、その他者の優れた能力、業績などにより自己評価を高めるもので、

比較とは、その他者より自分が優れた能力を持っていると考えることで自己評価を高めるものである。

例えば、「前田君は心理学が得意で、教育臨床心理学のテストで満点を取った。でも、スペイン語は僕の方ができる」

といったものである。

- ⑤ 成功の確信がない時に、あらかじめ自分に不利な条件を設定したり、不利であることを主張することである。

これによって、実際に失敗した時はその条件のせいにして、成功した場合には、「不利な条件にも関わらず」と自己評価をさらに高めることができる。